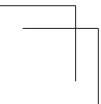
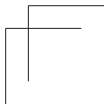
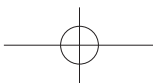
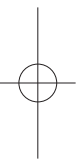
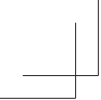
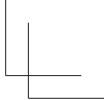
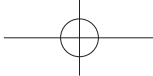


熱風団地



「佐拔さんですか」

不意に話しかけられ、佐抜克郎かつろうはとびあがった。成田なりた空港第二ターミナルの国際線出発口の前だ。五日間にわたって同行した中国雲南省うんなんからの団体客十八人を見送ったところだ。十八人のうち十人は六十歳以上で、七人がイ族やワ族などの少数民族だ。海外旅行の経験はあっても、いったのは地続きのラオスやミャンマーくらいで、全員初来日という団体だった。

日本慣れし、フグやウナギ、果ては今どきはやりのラーメン店にいきたがるような手合いとは違い、朴訥ぼくとつな人たちだ。ブランド品を買うこともなく、家電製品の山を担いで帰ろうともしない。中の二人は普通話（中国共通語）が得意ではなく、佐抜がビルマ語を話すのを知って大喜びだった。ガイドを務めていた旅行中はすっかり頼られ、佐抜が独身だと知ると親族との縁談をもちかけられた。

北京ペキンや上海シャンハイ、重慶じゅうけいといった大都市から来る観光客にはまずいないタイプだ。日本の田舎にだっていないだろう。

大都市から来る観光客は今どきガイドなど頼まないか、いても本国から同行する中国人ばかりだ。佐抜のように日本人でフリーの者は、辺境地区から来る団体か変わり者の個人旅行者かアテンドくらいしか仕事がない。

この団体が帰ったあとは二ヶ月間、ガイドの仕事が入っていなかった。スマートフォンがガイドの仕事を奪ったのだ。

初来日した者でも、アプリで公共交通機関の乗り方を検索し、地理を調べ、翻訳ソフトで道を訊く。観光情報は、ネットからいくらでも引きだせる。それこそミシユランガイドに載った店から今どきはやりのラーメン店まで、予約代行サービスもあるとなつては、フリーガイドは出る幕がない。

話しかけてきたのは、紺と黒のスーツを着た、体格のいい男二人だった。もつとも小柄で痩せぎすな佐抜から見れば、たいていの男は自分よりは体格がいい。

「はいっ。そうです！」

不意をつかれた驚きから立ち直れず、佐抜は自分でもわかるほど裏返った声で返事をした。話しかけてきたのは紺スーツで、黒スーツは笑いをこらえているような表情だ。

「突然失礼致します。我々は外務省の関連団体の者です」

「外務省?!」

さらに一オクターブ、声が跳ね上がった。

大学の外国語学科を出て、最初に入りたいと考えたのが外務省だった。が、外郭団体も含め試験にことごとく落ち、商社や大手旅行代理店の就職にも失敗した。

理由はわかっている。あがり症のせいだ。普段なら何でもないことが、人前に立つたり、面接のような場面では、まったくできなくなる。頭の芯が熱を持ったようになって、自分が何を話そうとしているのか、わからなくなってしまうのだ。

あがり症は子供の頃からで、大人になれば治るといわれていたのだが、まったく変わらない。

ただ、日本語以外の言葉で話しているときには不思議とあがらない。

なので、団体の観光客を前にしても、外国語を喋しゃべっている限りは、異常に緊張するということはなかった。

「の、関連団体です」

紺スーツはいつて名刺を差し出した。

「NPO法人『南十字星』 東京本部 阪東武士ばんとうたけし」と記されている。

「NPO、ですか」

少し落ちつき、受け取った名刺を佐抜は見つめた。外務省とNPOというのが結びつかない。

「実は佐抜さんにお仕事のお願ねがいがありまして。今日、これから少しお時間をいただけませんか」

阪東はいった。時間ならいくらでもある。ありすぎて困っているのだ。

「あの、ガイドでしょうか」

「南十字星」という法人名からでは、まるで活動内容がわからない。

「それはこれからお話しします。佐抜さん、このあとは東京に戻られるのですよね」

「はい」

「お車か何かで？」

「いえ、電車です」

チャーターしていたバスはとうに帰した。

「では、我々の車でお送りします。途中、車内でお話しするというのはいかがでしょう」
阪東の言葉は淀とどみがなく、佐抜は思わず頷うなずいていた。

「わかりました」

阪東ともうひとりに従い、佐拔は第二ターミナルの出發ロビーを抜けた。

「あの車です」

ハイヤーやタクシーなどの迎車に交じって止まるシルバーのセダンを阪東は指した。

NPO法人というと、資金繰りに苦労しているイメージがあるが、この「南十字星」はそうではないらしい。セダンには運転手が乗っている。

黒スーツが助手席に乗り、佐拔と阪東は後部席に並んで座った。

「会社は箱崎はこざきでしたよね。そちらでよろしいですか」

阪東に訊かれ、佐拔は頷いた。会社といっても、大学の先輩がやっている編集プロダクションの片隅にデスクと電話を置かせてもらっているだけだ。仕事の大半はもち歩いているパソコンで用が済む。

「箱崎だ」

阪東がいい、セダンは発進した。

「しかし佐拔さんというのは珍しいお名前ですね。字は違いますが、四国がルーツとかなのですか」

阪東は訊ねた。

「元は九州のようですが、私は埼玉生まれの埼玉育ちです」

佐拔は答えた。

「ほう、埼玉。じゃあご両親は埼玉にいらっしやる？」

「父はもう亡くなりました。私が九歳のときなんで、二十五年前です。母は——」

答えかけ、一拍おいて、

「元氣です」

と佐抜はいうに留めた。母親は佐抜が高校を卒業した十六年前に再婚した。大学進学を機に実家を出て、今は母親とはメールでやりとりするくらいだ。

「なるほど。そうでしたか」

たいした話でもないのに、さも感心したかのように阪東は答えた。

「ところで大学でのご専攻はベサール語でらっしゃいましたね」

やはりそこか、と思った。

「そうです」

「中国語もお話しになれるようですが」

「はい。あとマレー語とビルマ語も少しは話せます」

「それはすごい」

今度は本当に感心しているように阪東はいった。

「ベサールにいかれたことはありますか」

ベサールはボルネオの北、南シナ海に浮かぶ、複数の島からなる国だ。直行便はもちろなく、中国あるいはベトナム、フィリピンなどからいくほかない。

「大学の卒業旅行でいこうと計画していたんですが、ちょうどそのタイミングでクーデターが起こって」

ベサールは十三年前まで、「ベサール王国」だった。それがクーデターで「ベサール共和国」に変わり、王族の一部は亡命した。今はクーデターの首謀者だった軍人が大統領となり、

独裁政治をおこなっているという。

話す人間が日本にはほとんどいないからと専攻したベサル語だが、今となっては後悔していた。ベサルには金鉱があり、話せれば商社などへの就職に有利だと教授にそのかされたのだ。

「あ、なるほど。クワン政権になったのはその頃ですか」

クワンというのがクーデターを起こした軍人の名だったと佐抜は思い出した。ベサルは多民族国家で、ベサル語は共通語だ。ダヤン族、マニー族、イグナ族、マレー人、中国人などで構成され、クワンは最大人口のダヤン族、王族はイグナ族だ。クワンの名を聞いたことで、大学時代の知識がよみがえった。

卒業してからはベサル語を喋ってはいない。が、マレー語やビルマ語に文法や単語が近く、その点で学んだのは無駄ではなかった。

「そうです。ですからいかずじまいでした」

「覚えていらっしゃいます？ ベサル語」

阪東は訊ね、

「アナタノオ年ハイクツデスカ」

とベサル語でいった。ひどい発音だ。

「三十四デス」

佐抜は答えた。

「え？ 何と？」

阪東は訊き返した。

「三十四です、と答えました」

「じゃあ、私のベサル語は通じたんですね」

嬉しそうに阪東はいった。

「他ノベさーる語ヲ知ツテイマスカ」

佐抜は訊ねた。阪東は首を振った。

「ごめんなさい。何とおっしゃったのかわかりません。ベサル語は今の言葉しか知らないんです。それもネットで調べて、ようやく見つけました」

そうだろう、と佐抜は思った。ベサールの総人口は八百万人に満たない。もし中国語も勉強していなかったら、言葉で食べていくのは不可能だった。もっとも、今のこの生活で食べている、といえるかどうかは微妙だが。

「ベサールの現状はご存じですか」

阪東が訊ねた。

「中国人がすごく増えている、と聞いています」

「おっしゃる通りです。南シナ海のあの辺りでは中国の影響力がたいへん強まっているようです。海軍だけではなく中国企業もかなり進出しているらしくて」

阪東はいった。

「阪東さんはベサルにいかれたことがあるのですか？」

「何年前に一度だけ。スマトラ、ボルネオといった島を回って、ベサルもそのときいきました。毀譽褒貶はありますが、クワン大統領もがんばっているなと思いました」

小国とはいえ元首を「がんばっている」というのはかなりの上から目線のだが、阪東自身

はそれに気づいていないようだ。

「そうなんですね」

「佐拔さんは現在のベサール事情にあまり興味を持っていらっしやらないのですか」

「興味がないわけではないのですが、毎日の生活がありますから」

「それはそうですね。ベサールの王族がどうなったか、佐拔さんはご存じですか」

「一部は国内に残り、一部は亡命したと聞いています」

「正確には王と第一夫人がベサールに留まり、王の弟と第二夫人が国外に出たのです」

「確か第二夫人は日本人でしたね」

それは何となく覚えていた。海外旅行でベサールを訪れた日本人のOLが見初められ、王様の第二夫人になったというシンデレラストoryだ。

「ええ。当初、王の弟と第二夫人はアメリカ合衆国にいたのですが、三年ほど前に第二夫人は日本に戻ってきました」

「お子さんも一緒ですか？」

第一夫人とのあいだには王女しかおらず、第二夫人が息子を産み、将来のベサール王になる、とクーデターが起きるまではいわれていた。

「息子さんも一緒です。王子ということになります」

「そうか。王子様か。そうなりますよね」

「今、行方がわからないのですが」

阪東はつけ加えた。

「え？」

「その王子様ですよ。今年十六歳になるのですが、第二夫人と暮らしていた家を出て、行方からなくなっているのです」

「家出、ですか？」

佐拔は訊ねた。

「だいぶ活発な息子さんのようですね。千葉の実家近くで第二夫人と暮らしていた頃から問題を起こしていたようです。日本での生活に馴染めずにベサールに帰りたいたびたびいつてたらしいのですが」

「お父さんが恋しかつたのじゃないですか」

亡命したのがクーデターの直後だとすれば、王子は三歳で父親と離れたことになる。佐拔も九歳のときに父親を亡くし、寂しいと感じたことがあった。

「かもしれないね。育ててくれた乳母や叔父おじさんのおかげでベサール語は話せるそうです」

「日本語も話せるのでしょうか？」

「それは話せるのでしようが」

答えて、阪東は一拍おいた。

「佐拔さんに王子を捜していたきたいのです」

「えっ、私に？」

「ええ。十代の男の子で、まあ問題児です。昔風にいえば不良というか、悪ガキのようです。日本をあまり好きではなく、ベサールに郷愁の思いを抱いているわけです。ベサール語の話せる佐拔さんなら、心を開くと思うのですが、いかがでしょう」

「いや、そんな探偵みたいなことはできませんよ」

「そんな大変な仕事ではないと思いますよ。しよせん十六歳の子供ですし」

「またも上から目線で阪東はいった。今の十六歳は相当な大人だと思うのだが、いい争っても仕方がない。」

「ただどうしてその王子を捜すのです？」

「実は、王様の具合がよくないので」

「阪東は、さも重大な秘密を打ち明けるように声を低めた。」

「よくない？」

「癌でしてね。国外の病院で治療を受けられればよかったです、クワン大統領が出国を許可せず、病状が悪化している。亡くなる前に王子に会いたがっているのですが、それを公にはできないらしい。それが巡り巡って、NPOの我々に何とかしてくれないかという話になったのです」

「NPOに、ですか？」

「そうです。『南十字星』は南沙^{なんさ}海域の国といろいろなネットワークがあるもので」

「そうなんですか」

「あくまでも民間レベルですけど」

「言い訳がましく阪東はつけ加えた。外務省の関連団体だといったくせに、怪しい。」

「佐拔さんしかいないのですよ」

「黙っていると阪東は押してきた。」

「でも私はそんな——」

「もちろん手数料はお支払いさせていただきますし、ここだけの話、王子を見つけて下さった

ら王様から謝礼もあると思います。ご存じのようにベサールは金の産出国です。かなりの高額になると思います」

「いや、やはりそういうことは警察とか専門のところに頼んだほうがよくはないですか」

「警察は動いてくれません」

「でも十代の家出でしょう？」

「犯罪に巻きこまれたというのではない限りは人手を割いてはくれません」

きっぱりと阪東はいった。

「じゃあ探偵とか」

「心を開きませんね。お話ししたように王子はベサールに望郷の念を抱いている。ベサール語を解さない探偵に心を開くとは思えません」

「でも居どころを捜すだけなら——」

「申しあげたように日本に馴染めず、問題行動を起こしていた子です。探偵が自分を捜しているとなれば、姿をくらませてしまうでしょう。ベサール語を話せる人が捜しているというのが大切なんです。王子の周辺には、ベトナムやカンボジアからの難民の子供がいて、グループを作っていたという情報もあります。そうした子供たちを相手にするには、言葉を話せなければ難しい」

「日本にいる子たちなのだから日本語が通じるのではないですか」

「どうですか。面倒そうな相手には言葉を話せないフリをして逃げるということもあるのじゃないですか」

阪東は苦々しげにいった。実際にそういう経験があるようだ。佐拔が考えていると、

「手数料は一日五万円プラス経費でいかがでしょう」

畳みかけてきた。

「そんなに?!」

「私の予想では、佐拔さんなら一週間もあれば、捜しだせると思うのですが」

「いや、それはわからないですよ」

「難しいようなら、アシスタントもご紹介します。アシスタントの費用もこちらでもちます」

「アシスタント……」

「頼りがいのある女性です。ペサールの現状についても、ある程度知識を持っています」

「じゃあその人が捜せば——」

いいかけると阪東は首をふった。

「佐拔さんでなければ、この仕事は無理です。ツアーコンダクターとして、さまざまな経験をお持ちで、なおかつペサール語に堪能な佐拔さんでなかったら、王子を捜しだすのは不可能だ」

そして上着の内側から無地の封筒を取り出した。

「ここに手付金として二十万、用意してあります」

「二十万」

佐拔はつぶやいた。今週中に間借りしている事務所の家賃を払わなければならない。三ヶ月分を滞納していて、「十万でいいから入れてくれないか」といわれている。その先輩の編集プロダクションも経営が苦しく、ずっと申し訳なく思っていた。

「見つけれなかったら返さなくてはならないお金でしょう」

「その必要はありません。まずは一週間、やってみて下さい。一週間ぶんの三十五万円は、たとえ見つけられなくてもお支払いします」

佐抜の目を見つめ、阪東はいった。そして返事を待たずに、助手席に座る黒スーツの肩を叩いた。

「はい」

黒スーツが膝ひざにのせていた鞆なげんから、大判の封筒を出してよこした。

「ここに第二夫人と王子の写真、自宅の住所や立ち回りそうな場所のリストが入っています。あと私の携帯電話の番号をお教えしておきますね」

いわれて、佐抜は自分のスマホを出した。互いに番号を交換する。LINEもできるようにした。

阪東は大小ふたつの封筒を佐抜に押しつけた。

「わからないことや困ったことがあったら、いつでも私の携帯に連絡を下さって結構です。できる限り協力させていただきます」

「あの、アシスタントの方というのは——」

「佐抜さんの携帯の番号を教えて、直接連絡してもらいます。よろしいですか」
「はい」

仕方なく佐抜は頷いた。

「それからひとつお願いがあります」

阪東は口調を改めた。

「この件については、秘密を守っていただきたい。特にベサルル王の病状が重篤であることは

マスコミなどに漏れないようにしていただきたいのです。王子に会うまでは、捜しているのは佐拔さんの個人的な理由からだということにして下さい」

「個人的な理由といわれても……」

佐拔は口ごもった。

「あなたは大学でベサル語を学ばれた。立派な理由になる筈です」

阪東は力づけるようにいった。

「箱崎に到着しました」

タイムングを合わせたかのように運転手がいい、セダンは首都高速の箱崎出口をくぐった。

「どちらで降りられますか？」

「そのあたりで結構です。ありがとうございます」

封筒を抱えたまま佐拔は答えた。セダンは新大橋通りにぶつかったところで停止した。

「落とすといけません。鞆にしまつて下さい」

阪東にいわれ、佐拔は言葉に従った。

「ではよろしくお願いいたします」

佐拔を降ろし、セダンは走り去った。

二

事務所に戻ると、誰もいなかった。先輩の柿内かきうちがやっている編集プロダクションは「パーシモン」という名で、柿内以外にフリーのライターやカメラマン複数が在籍している。忙しいと

きはそうしたメンバーが二、三人事務所に泊まりこむこともあり、佐抜はインスタントラーメンを作ったり、届けものを手伝ったりする。

ボードの予定表を見ると、

「Cマガジン取材 直帰」

と柿内の字で書きこまれていた。

金を渡し、相談もしようと思っていた佐抜はがっかりして自分の机に腰かけた。時計を見ると午後四時を回ったところだ。

パソコンのメールをチェックしたが、誰からも何もきていない。

受けとった封筒から十万円をだしたところで、阪東が領収証を求めなかったことに気づいた。いくらNPOといえ、領収証なしで二十万円もの金をだせるとは思えない。

佐抜を説得するのにけんめいで、領収証を書かせるのを忘れたのだろう。次に会ったときに備え、領収証を作っておくことにした。

「株式会社サヌキエンタープライズ」の名で業務手数料の名目で金額を書き、社判を押す。

それから大判の封筒を開いた。

写真が数枚入っていた。同じ写真が大小二枚で三組ある。第二夫人、王子、王様の三人のようだ。小さい写真は手札判で、もって歩けるサイズだ。スナップではなく、プロのカメラマンが撮ったような正面写真だった。

まず第二夫人。週刊誌などで騒がれた二十年近く前に見た覚えがある。当時は二十代の初めだったから、今は四十を過ぎている筈だ。

黒髪のロングヘアを額の中心で分けた、ややクラシッくな髪型で、目も鼻も口もこぶりな人

形のような顔立ちをしている。口もとには笑みがあるが、目にどこか不安げな光があった。背景がはっきりせず、撮られたのが日本なのかベサルルなのかもわからない。

「ベサルル王第二夫人、アリヨシャ・シオリ（旧名 長谷部紫緒里）」と大判の写真の裏に記されている。

次に王子だ。これは日本で撮ったとすぐにわかった。中学校の制服らしきブレザーとネクタイを着けているからだ。いかにも生意気そうな目つきでカメラをにらんでいる。鼻すじの通った貴族的な顔つきで母親ではなく父親に似たようだ。

「ベサルル王第一王子 アリヨシャ・ケント（健人）」と記されていた。ベサルルでは姓名の順が日本と同じであることを佐抜は思いだした。

王様は、白い軍服を着け、胸にいくつもの勲章を留めている。浅黒く、彫りの深い顔に白いヒゲをたくわえていた。第二夫人よりはだいぶ年上で、今は七十代の半ばくらいになる筈だ。

しばらく三人の写真を見つめてから、佐抜はパソコンで「ベサルル」を検索した。

「ベサルル共和国（旧 ベサルル王国）。南シナ海の島嶼国家。ボルネオ島の北、フィリピン

の西、南沙諸島の約千キロ南西に位置する。一四〇〇年代に起源があるとされるイグナ王朝によって、独自の文化、言語を発展させていたが、一七九〇年からイギリスの植民地支配をうけ、一九六二年の独立までそれはつづいた。

約七百万人の人口は、最大人口のダヤン族、イグナ族、マニー族、マレー人、中華系などの民族で構成されている。共通語はベサルル語だが、それぞれの民族の言語もある。二〇〇七年、ダヤン族でベサルル海軍に所属するハリカム・クワン大佐によるクーデターが勃発し、王族は政権を失った。王族の一部はアメリカ合衆国に亡命したが、国王アリヨシャ・イグナ六

世は国内に留まった。以降、クワン大佐による独裁政治がつづいているが、政情は安定し、天然ガスや金の産出で、経済も比較的豊かだとされている。

クワン大佐の新ベサル政府をアメリカ、イギリスなどが承認せず、日本も追随したため、国交は途絶している。クーデター以前は、日本国内に約百人のベサル人が居住していたが、大使館が閉鎖された現在の人数は不明。

国王であったアリヨシヤ・イグ十六世の第二夫人は日本人だが、クーデター後の消息はわかっていない」

百人ものベサル人が日本国内に居住していたとは知らなかった。会ったことのあるベサル人は、佐抜にベサル語を勧めた杉本教授すぎもとの自宅で紹介された二人だけだ。

あのベサル人、名前を何といつただろうか。確か、リユーとアフマドだった。二人とも日本の商社で働いていると書いていた。クワン大佐によるクーデターが起こる前だ。

控えめでおだやかな人たちだった。

そうだ、杉本教授がいる、と佐抜は思いついた。自分の知る限り、ベサルとベサル人について最もくわしい人物だ。変わった人だがとにかく顔が広い。年賀状の返事が三月に届き、大学を退職すると書いてあった。退職後どうしているのかはわからないが、相談にはのってくれるだろう。

杉本教授は携帯電話をもっていなかったが、自宅の電話番号は知っている。佐抜はパソコンに入れた住所録を開いた。

杉本教授の住居は、六本木ろっぽんぎだった。ミッドタウンの近くだが、小さな戸建てや古いアパートが密集する一画で、六本木にこんな場所があるのかと驚いた記憶がある。結婚して数年で亡く

なってしまった夫人の実家にそのまま住んだのだと、教授から聞いていた。

佐拔は教授の自宅の電話を呼びだした。長い呼びだしのあと、

「はい、はい」

と、なつかしいしゃがれ声の返事があった。

「杉本先生、佐拔です」

不安になるほど間が空いた。

「おお、思いだした。佐拔くん。ベサル語をやった」

「そうです、その佐拔です」

ほっとした。

「今、晩飯を作つとるんだ。そうだ、君も食いにこんか」

「えっ、あの……」

絶句した。料理は杉本教授の趣味だ。やもめ暮らしが長いので、自炊には慣れていているようだが、問題はその味だ。杉本教授には独特の味覚があり、これまで何を食べさせられても「おいしい」と感じたことがない。本人は「うまい」を連発するのだが、佐拔にはつらい記憶しかない。確かベサル人二人と会ったときも手料理をご馳走ちそうになったが、教授を除く三人はふた口以上食べられなかった。

だが教授に話を聞くのに、これ以上の機会はない。

「うかがいます」

「どこからだ？」

「えーと、箱崎の事務所にありますので――」

「一時間はかからないな。わかった。待つとるぞ」
「よろしく願いましたます」

告げて佐拔は電話を切った。不安だったが、結局二十万円をもって事務所をでた。人形町で和菓子を買ひ、地下鉄日比谷線で六本木に向かう。

杉本教授の家の前に立ったのは、午後五時四十分だった。木造の、小さな二階屋だ。玄関先にソテツが植えられている。塗りのはげた木製の扉にとりつけられたインターホンを押す。

「佐抜くんか」

「はい」

「上がってきなさい」

「承知しました」

扉に錠はかかっていなかった。開けると、異臭が鼻にさしこんだ。砂糖と醤油が焦げたような匂いに、魚醬の強い香りが混じっている。

「失礼します」

佐抜は声をかけ、靴を脱いだ。狭い廊下のつきあたりがリビングで、確かその横がキッチンだ。

リビングに入ると、四人がけのテーブルに教授が皿を並べていた。ジーンズ姿で、胸まであるエプロンを着けている。皿には、魚の切り身らしきものに茶色いソースのかかった料理がのっていた。

「突然お邪魔して申しわけありません」

「いやいや、鯛も一人はうまからず、だ。飯は多いにこしたことがない。さつ、すわんなさい。」

今日のメニューは、サンマの煮付けの豚そぼろあんかけと、グリーンカレー杉本流だ」

魚の煮付けとカレーというとりあわせがすでに厳しいのだが、教授にかかるとカレーはとてつもなく香辛料がきいたものになる。辛いだけではなく、香りも強烈なのだ。

佐拔は覚悟を決めた。

サンマの煮付けは和風の味つけとナンプラーが喧嘩けんかをされていて無理やり呑みこむ以外なかったが、グリーンカレーはごろごろ入ったリングゴさえ気にしなければ、何とか食べられた。

カレーにリングゴを入れたのは、カレールーのテレビコマーシャルから着想を得たのだ、と教授は自らの料理を自画自賛した。

「ほれ、リングゴとハチミツ……というのがあるだろう。ハチミツはないから、かわりに黒蜜みつを入れたんだ。近い味になつとるかどうかはわからないが、これはこれでうまい。どうした？ 魚は苦手だったっけ？」

「いえ、そうじゃないです。あの、昼飯が遅かったもので」

「なんだ、そうなのか。だったら私が食おう」

教授はいつて、佐拔の皿にも手をのぼした。

杉本教授は身長一八〇センチで横幅もたつぷりある。もじゃもじゃの白髪が襟にかかるほど長いのは、床屋にいつていないからだろう。床屋で過ごす時間が無駄だといつて、教授はふた月か、み月に一度しか髪を切らない。年齢は七十になった筈だ。

「うん、うまいな、やっぱり。こううまいものが作れると、外で食う気にはならんな」

佐拔のぶんの煮魚も平らげ、教授は満足げに唸うなった。

「ごちそうさまでした。洗いものは僕がします」

いって、佐抜は買ってきた和菓子をさしだし、キッチンに立った。キッチンにはアジアの屋台街のような匂いがこもっている。

「悪いな。じゃあ頼む。私はコーヒーをいれよう」

佐抜が洗いものをしているあいだに、教授はエスプレッソマシンでコーヒーをいれた。

エスプレッソマシンは、教授の還暦祝いに、OB、在校生で金をだしあつてプレゼントしたものだ。

洗いものを終えた佐抜は、再びリビングで教授と向かいあつた。

「ふむ。じゃあ聞こうか」

コーヒーをすすり、教授はいった。

「電話をしてきたのは、何か理由があつてのことだろうか？」

脚を組んだ教授の尻の下で木の椅子が悲鳴をあげた。体重は百キロ近いにちがいない。

「はい。先生は、ベサル王国の第二夫人が日本にいることをご存じですか」
太くて濃い眉を教授はつりあげた。

「なんだ。いきなりそこか」

「実は――」

佐抜は成田空港で阪東らに声をかけられ、ベサールの王子捜しを依頼されたことを話した。

「NPO法人、『南十字星』」

つぶやいて教授は首を傾げた。

「ご存じですか」

「いや。まったく聞いたことがない。外務省の外郭団体といったのか」

「ええと、関連団体です」

「関連団体とはまた都合のいい言葉だな」

佐拔は教授を見つめた。

「都合がいい？」

「ああ、そうだ。外郭団体となれば確かなつながりだが、関連団体というのは、どうとでも使える。出入りの水道屋だって、関連団体といえは関連団体だ」

「確かにその通りですね」

教授の言葉に佐拔は頷いた。

「だが、君を車で送ったり、二十万をぼんと渡したところを見ると、細かな金には困っていないようだ」

「それに領収証を書けともいいませんでした。忘れただけかもしれませんが」

「機密費が使えるということだ」

「機密費ですか」

「そうだ。私の考えじゃ、その『南十字星』というのは、スパイ組織だな。外務省だか警察の情報機関だろう」

「情報機関?!」

「うむ」

教授は重々しく頷いた。

「日本の、ですよね」

「おそらくな。だが中国のスパイが日本のスパイに化けているのかもしれない。中国のスパイだ

といえば、君の協力を得られないかもしれないからな。いや、そんなことはないか。君は旅行ガイドをやつとるのだったな。それならむしろ中国政府の者だといったほうが、威しがきくか」「どういうことですか」

ひとりで話しひとりで納得している教授に、わけがわからず佐拔は訊ねた。

「君の客は中国人が多いだろう」

「はい」

「中国政府からすれば、その客を増やすのもゼロにするのも簡単だ。何せ、日本以上に中国ではお上の力が強い」

「確かにそうですけど、僕みたいな個人ガイドを威して何になるんです？」

「わからん奴だな。飴と鞭だよ。協力してくれるなら、客をいっぱい紹介する。してくれないなら、今後一切、中国人のガイドをさせん、という。いうことを聞くほかあるまい？」

「それは、その通りです。でもなぜ、ベサールの王子を僕に捜させるんです？」

「それは君が適任だからだ。その『南十字星』が、中国のスパイだろうと日本のスパイだろうと、ベサール語を話せる者でなければ見つけれないと踏んでおるのだ」

「探偵じゃないのに、ですか」

「探偵のことはよくわからんが、いくら優秀だろうと言葉を話せなかつたら仕事にならん筈だ。まして君の話では、王子は問題児ということだ。問題を起すような子供は、知らない大人に簡単には心を開かんものだ。ベサール語を話せるというのは、アドバンテージになる」

佐拔は考えこんだ。教授はつづけた。

「だが今になって王子を捜せというのは、どうも妙だ」

「今になって?」

「第二夫人と王子は三年前に日本にきた、と君は聞いたのだろう。それがなぜ今になって居場所を捜す?」

「それは王様の具合が悪いからじゃないですか?」

阪東からはそう聞いている。

「たとえ死にかけているとしても、一度は亡命した身だ。王に会いたいからとベサルルに戻ったら、二度とでられなくなるかもしれん。クワンは独裁者としては比較的穏健だが、次期国王が戻ってきたら、放置はせんだろう」

「それは、またクーデターが起こるかもしれないということですか」

「反クワン派にとって、王子は格好の御輿みことなる」

「反クワン派が存在するんですね」

「当然おるだろう。単に王を敬っておるだけでなく、王制時代に利権にありついていた者は、夢よもう一度と願っていて不思議はない。クワン政権になってからは冷や飯を食わされているにちがいないからな」

もしそんな意図が「南十字星」にあるとすれば、かかわらないほうがいい、と佐抜は思った。

「しかもベサルルのある南シナ海一带は、中国が進出し、キナ臭いことになっておる」

教授の言葉に佐抜は頷いた。

「マズいですよね、やっぱり」

「いや」

教授は首をふった。

「これはチャンスだ」

「えっ？」

「佐抜くん、またとないチャンスだぞ」

「どういうことです？」

「君にベサール語をやるよう勧めたのは私だ。あのときはクーデターが起こるとは夢にも思わず、金と天然ガスでベサールの未来は明るい、と私は信じていた。ところがクワン大佐のせいでは日本は国交を断ってしまった。もし王族が実権をとり戻せば、君の学んだベサール語は役に立つ。いや、それどころではない。君の行動しだいで、次期国王と大きなコネクションを作ることが可能だ」

興奮しているのか、教授の顔は赤い。

「いや、でも、そんな……」

「佐抜くん、この仕事はぜひやりなさい。それが君のためでもある」

「だけど、その、クーデターというのは、おおげさじゃないですか」

「いや、そんなことはない。王が病気で余命いくばくもないのであれば、王子は当然、クワン一派にとって災厄のもととなる。場合によっては暗殺も考える筈だ」

「暗殺！」

佐抜は思わず声を上げた。いくらなんでも物騒すぎる。

「『南十字星』の目的は、王子の暗殺か保護か、いずれにしても、君しだいということだ」

「まさか、先生。暗殺の片棒なんてかつげません」

教授は佐抜を見つめた。

「すべては君しだいだ」

「僕しだい……」

佐抜がつぶやくと教授は重々しく頷いた。

「そうだ。『南十字星』の目的が王子の保護なら、君は協力すべきだ。いや、人道的見地からも協力する義務がある」

「義務って、そんな。かわりに誰か——」

「ベサール語を話せる者が少ない、というのを忘れてないか」

「いや、だったら日本語の話せるベサール人はどうなんです？ 以前ここでお会いしたりユースさんとアフマドさんでしたか。あのお二人はどうしていらっしやるんです？」

「二人ともベサールに帰った。クーデターで故国がどうなったのか心配してな。その後、音信不通だ」

教授の答えを聞き、佐抜は息を吐いた。黙っていると、

「もちろん私も協力する。君に対する責任もあるが、この話にはロマンがある」

「ロマン、ですか？」

「そうとも。一国の国王に感謝される可能性を秘めておる。場合によっては、ベサールに国賓として迎えられるかもしれない」

教授の目は輝いていた。

いくら何でもそれはない、と佐抜は思った。教授の考えは、暴走いや妄想に近い。とはいえ、教授の協力が得られるなら、やってみてもいいのではないか。

何より、ガイドの仕事は当分ないのだ。生活のためのアルバイトを探すくらいなら、こちら

のほうがよほど収入が得られそうだ。

ただし暗殺とかそういう物騒な話は勘弁してもらいたい。

「そうだな。まず『南十字星』の正体について、政府機関や国際政治について詳しい友人に訊ねてみよう。それに在日ベサル人の消息に関しても、何か知っている者がいないか当たってみる」

「お願いできますか」

佐抜の問いに教授は力強く頷いた。

三

六本木の教授の家を辞したのは、午後八時過ぎだった。

「南十字星」の依頼を受けるべきかどうか、また受けるとしたらどこから手をつけたらよいのかを相談するつもりだったのが、受ける以外ない、という結論になってしまった。

もし「南十字星」が、王子の暗殺を企てる側に属していたらという佐抜の質問には、「そのときはむろん王子の命を救うため、しかるべき筋に知らせ、救援をおおぐのだ」

さっぱりと教授は答えたものだ。

情報が入りしたい、携帯なりパソコンのメールに連絡をもらうことを約束し、佐抜は自宅に戻った。

自宅は東急東横線の都立大学駅から歩いて十五分ほどの距離にある、大学生のときから住んでいるマンションだった。

築三十年の八階建てマンションの五階にある二DKが、佐抜の住居だ。

シャワーを浴び、ソファに寝転がってほっと息を吐く。ふだんは酒を飲まないが、珍しく一杯やりたい気分で、冷蔵庫に何本か入っている缶ビールを開けた。

携帯が鳴った。母親だった。

「克つちゃん？」

「そうだよ。どうしたの？」

ふだんはメールのやりとりしかない母親が電話をよこすのは珍しい。

「え？ 別に。ただ久しぶりに克つちゃんの声を聞こうと思って」

母親は今年五十六になる。二十二で佐抜を産み、三十一のときに未亡人になって四十で中学の同級生と再婚した。佐抜が高校を卒業した年のことだ。

ずっとつきあっている男性がいるらしいことはわかっていた。すぐに再婚しなかったのは佐抜の気持ちを考えてだろう。

大学入学のために佐抜が上京するタイミングで再婚した。

「またケンカした？」

佐抜は訊ねた。母親は黙っている。母親の再婚相手は埼玉の地元でスナックやカラオケボックスを経営しており、いつのまにか母親もスナックで働くようになった。明るい性格の母親には合っていたのだろう。人気の「ママ」になったようだ。だがそうになると、今度は連れ合いがヤキモチを焼くようになった。

その連れ合い、佐抜にとつての継父は敷島しきしまといって、馬鹿がつくほどお人よしで一途な人間なのだ。母親はいう。中学時代に好きだった相手が未亡人になっても、再婚を十年近く待った

ことを考えると、そうなのかもしれない。佐抜も二度ほど会ったが、悪い人間には見えなかった。ただし見かけは別だ。敷島は、いわゆる「ヤンキー」で、高校を中退し土建業をやっていたらしい。小さな工務店をもつところまでいったが、早起きが嫌になったと、突然水商売に鞍替えし、それが成功したようだ。

初めて会ったとき、敷島はヤクザにしか見えなかった。光沢のある生地ブルゾンを着て口ヒゲを生やし、やたらに目つきが鋭い。

「恐がらないで、克つちゃん。見かけは悪いけど、心根はいい人なの」
母親がいわなければ、その場から逃げだしていたかもしれない。

「ども。よろしく」

そんな風貌なのに、恐ろしく小さな声で敷島はいった。それを母親がどやしつけた。

「ちゃんと挨拶して。息子なんだから」

敷島は首をすくめた。

「すんません。敷島といいます。よろしくお願いします」

あつげにとられている佐抜に母親が告げた。

「敷島くんは中学の同級生なの。ずっとわたしのことが好きだったんだって。結婚してくれてうるさいから、することにした。いいでしょう?」

「お母さんがそうしたいのなら、いいよ。もちろん」

佐抜が答えると母親が何かいう前に敷島が鬼のような形相でいった。

「お母さんを必ず幸せにします。これからは俺のことを親父だと思って頼ってくれ」

「は、はい」

頼うなずいたものの、とうてい親しくする気にならないまま、十六年がたった。正月やお盆などの休みに、埼玉に遊びにこないかと誘われるが、成人してからは仕事が忙しいからと断っている。

「悪気はないのはわかってるのだけどさ」

母親がため息まじりにいった。

「え、手とかあげるの？」

「それはないわよ。そんなことしたら、すぐにでてくから。わたしに指一本触れられない」

「本当に？」

「あの人はね、女には優しいの。キレると、男には容赦ないけど。この前も、地元じゃないところから飲みにきてたチンピラがちよっと生意気なこといったら、店の裏に連れて行ってポコポコにした」

「じゃあなんでケンカになるんだよ」

「お客さんにヤキモチ焼くのよ。カラオケのデュエットで、わたしの肩とか抱こうものなら、もう大変なの。お前、表にでろって。それが仕事なのに。信じられない」

「水商売、向いてないよね」

「そうなのよ！」

母親は勢いこんだ。

「変な話よね。まるで水商売を知らなかったわたしのほうが向いていて、ずっとやってた敷島くんが向いてないなんて」

母親といっしょにならなければ、ヤキモチを焼くこともなかったのだろう。

「で、今は家なの？」

「そう。お客さんに失礼なことというから、わたし店をとびだして帰ってきちゃった。少し反省させようと思って」

「それで俺に電話してきたんだ」

「まあ……そういうこと。あ、キャッチ入った。敷島くんだな」

「仲直りして下さい」

「克ちゃん元気なのね」

「元気だよ」

「お嫁さんは？」

「予定なし」

「残念。じゃ、またね」

いって母親は電話を切った。自分が結婚すれば母親が安心するのはわかっているが、この十年、恋人はいない。大学時代からつきあっていた子は、突然、就職先で知りあった相手と結婚すると佐抜のもとを去った。ふたまたをかけられていたと、あとになって知ったが、恨む気にはならなかった。それ以来、つきあった女性はいない。

どうして皆、簡単にパートナーを見つけれられるのだろうか。どこで出会い、どうやって心を許し合うのか。それがわからない。

佐抜にも結婚に対する憧れはある。

問題は、今の自分の収入では、どうして結婚などできない、ということだ。結婚相手に専業主婦をしてもらうのは、夢のまた夢だ。

共稼ぎだっつかまわないという女性もいると思う。いや、今はむしろ結婚しても仕事を辞

めたくないという女性のほうが多いかもしれない。

もちろんそれはそれで一向にかまわない。だが、そういう自立精神をもった女性の目には、自分は決して魅力的に映らない。あがり性のせいで、臆病おくびょうで頼りない人間に思われてしまうのだ。そしてそれは、あながち外れてはいない。別に引っこみ思案でも恐がりでもないつもりだが、初対面の相手にはまずまぢがいなくそう受けとめられてしまう。

子供の頃からだったが、幸い、いじめなどの標的にされることはなかった。

携帯が鳴った。また母親か。うんざりして手にとると、知らない携帯番号が表示されている。

「はい、佐拔です」

『『南十字星』の阪東って人にこの番号、教わったんだけど』

ぶつきら棒な女の声があった。

「え？」

「だから、阪東に、あんたに電話しろっていわれたんだよ。まぢがい？」

「いや、ええと、阪東さんなら知ってます」

『『南十字星』の阪東だよ』

「NPO法人の『南十字星』の阪東さんですよね」

「そうだよ。あんた、くどい性格？」

「は？」

『『南十字星』の阪東でわかるだろうが。いちいち説明する必要ないつうの』

女はいらだったようにいった。

「ええと、失礼ですけど、そちらは——」

「ヒナだよ」

「ヒナ？」

「名前に決まってる。あたしの名前がヒナっていうんだよ」

「ヒナさん、ですか」

「そう。阪東から聞いてない？ あんたを手助けするよう頼まれてるんだけど」

「ああ……」

アシスタントを紹介すると阪東はいつていた。頼りがいのある女性だ、とも。そして、

「ベサールの現状に詳しい方ですね？」

佐抜は訊ねた。

「いや。そんなに詳しくない」

女はあっさり否定した。「でも阪東さんは——」

「あたしの母親がベサル人なんだ。父親は日本とフィリピンの混血で」

「ベサルにいかれたことは？」

「あるよ。十六歳までいた。それから日本にきて、いろいろあって、今」

「今」で切られても、その「今」が何なのか、佐抜には想像がつかない。

「そうなんですか」

「とりあえずさ、一回、会わない？」

女はいった。

「そうですね。お会いしていろいろ相談したほうがいいと思います」

「ええと、名前何だったっけ？」

「佐拔です」

「そうだ、佐拔だった。明日、何してる？」

「特には、何も」

「じゃ、新宿で会おうか」

「はい。新宿のどちらで？」

「そうだな。リージェントパークホテルわかる？」

ガイドする客を何度も迎えにいったことがある。

「あ、わかります」

「そのロビーで、午後二時。どう？」

「大丈夫です。何か目印をもっていきましようか。そうだ、赤いキャップをかぶっていきま
す」

佐拔はいった。初対面の客のために、中国国旗をデザインしたキャップをかぶっていくこと
がある。

「赤いキャップね、わかった。じゃよろしく」

電話は切れた。佐拔は息を吐いた。一方的なやりとりから、かなり強気な性格の女性だと知
れた。苦手なタイプだ。

だが十六歳までベサールにいた、というのは頼れる気がする。当然、ベサール語も話せるだ
ろう。王子を捜すのに役立つ情報をきっともっているにちがいない。そうでなければ阪東が紹
介する筈が**はず**がない。

明日に備え、ベサール語の復習をしておこう。そう思って古いノートをひっぱりだしたが、

久しぶりに飲んだ酒のせいで、一時間とたたないうちに眠くなってきた。つぎは朝からと決め、佐拔はベッドに入った。

四

午前中をベサル語の復習にあてた佐拔は少し早めに自宅をでた。箱崎の事務所へ寄って、柿内に十万円を渡した。柿内は今もつきあいをつけている、数少ない高校の先輩だ。大学卒業後に入った出版社を三十を機に辞め、編集プロダクションを起こした。その出版社が二年後に倒産すると、かつての同僚が所属するようになって、業務が拡大した。が、経営は決して楽ではなく、自転車操作がつづいている。

「助かる！ いや、ありがたい！」

四十前なのに、ひどく薄くなった頭を下げ、柿内はいった。

「助かるなんてとんでもない。僕のほうが迷惑をおかけしてるのに」

「いや、苦しいのはお互いさまだからな。恩に着る。これからライターと打ち合わせなんだが、向こうも金欠で、少しでもいいから手付けをもらえないかといわれてたんで、この金で何とかなりそうだ。すごく使える奴なんだが、ギャンブルに目がなくなつてさ」

「大丈夫なんですか」

「何万か渡しても、すぐ溶かしちまうだろうけど、書いてくれりゃいいんだ。ありがとう！」

早速いってくる」

柿内がでていくと、佐拔は事務所においてあるキャップをバッグにおさめた。仕事るときは

基本、スーツにネクタイと決めている。紺のスーツに赤いキャップという組み合わせはかなり目立つので、初めて会う客にもすぐわかるのだ。赤地に、黄色い大きな星がひとつ、囲むように四つの星がデザインされている。五光星といい、赤は革命を黄色は光明を、大きな星は中国共産党、小さな星はそれぞれ労働者、農民、知識階級、愛国的資本家を象徴する、といわれている。「五星紅旗」という名前で、ガイドする客に何度も「その星の意味を知っているか」と訊かれることがあって、すらすらと答えられるようになった。

答えたついでに、「日本の国旗を知っていますか」と佐拔は訊ねることにしている。

多くの客が日の丸だと答えられるが、その意味については知らない。赤い丸は太陽をかたどっているのだと教えると、皆、意外そうな顔をする。太陽は、黄色か金色ではないのか、というのだ。朝日や夕日は赤い、と説明すると納得する。

地下鉄で新宿に向かう。リージェントパークホテルは西新宿にたつ高層ビルのひとつだ。

午後一時五十分に到着すると、キャップをかぶって佐拔はロビーの扉をくぐった。ランチタイムも終わり、ロビーは閑散としている。

ソファに個人観光客と思し^{おほ}しい中国人が何人かすわりこんでいるほかは、人がいない。このホテルのカフェテリアは、エスカレーターで上った中二階にあるのだ。

キャップをかぶったままロビー内を歩き回って見たが、声をかけてくる者はおらず、それらしい女性の姿もない。

佐拔は空いているソファのひとつに腰をおろした。膝^{ひざ}の上にバッグをおき、ロビーの扉を見つめる。

二時を回った。それらしい女性は現れない。時間を聞きまちがえたのだろうかと考え始めた

とき、大柄の女性が扉を押して入ってくるや、まっすぐ佐抜に向かってきた。

ジーンズにブーツをはき、鉸びょうがいくつも打たれたごつい革のジャンパーを着ている。身長は一七〇センチ以上あり、明らかに佐抜より高く、肩幅もある。太っているとまではいえませんが、女性としてはかなりがっちりとした体格だ。髪を長めのおかっぱにして、浅黒い顔の目鼻立ちがくっきりしていた。

佐抜は思わず目をみひらいた。知っている顔だった。髪の色こそ黒くなっているが、これがまっ赤だったら、

「レッドパンサー！」

思わず叫んでいた。後樂園こうらくえんホールに何度も試合を見にいった。所属する団体のファンクラブにも入っていた。四年前に突然引退するまでは、ずっと応援していた。

東亜女子プロレス所属、南シナ海の女豹めひょうこと「レッドパンサー潮うしほ」だ。

「でけえ声だすなよ」

女はいった。否定しないところを見ると、本人にまちがいない。

「でもでも、潮さんでしょ」

「そうだよ。しっ」

女は恐い顔で佐抜をにらんだ。その目だった。リング上で試合相手をにらみつける鋭い視線に惹ひきつけられた。

「あの、ファンだったんです。何度も後樂園ホールまで見にいきました」

「引退したんだ」

「知ってます。引退試合も見にいきました。まっ赤なコスチュームがすごくかっこよかった

……」

「いいから。今はもうちがうんだ」

いらだったように女がいい、佐抜は我にかえった。だがアガってしまって、うまく言葉がない。声も裏返っている。

「えーと、そのう、待ち合わせたのはあの、僕ですか」

女はあきれたように首をふった。

「そうだよ。赤いキャップなんて、ダサイ帽子かぶってここにいるのはあんただけだろ」

「つまり、その、ヒナ、さん？」

「そういうこと。佐抜だろ」

「そうです！」

佐抜はいって立ち上がった。

「初めまして」

右手をさしだした。

「やめろって」

女はそれをふり払った。

「すみません。緊張してしまって。ファンだったものですから」

「それはもう聞いたよ。大丈夫か、あんた」

ヒナは佐抜を見つめた。その目がまた惚れ惚れするほどきつい。

「ごめんなさい。あがり性なんです。待ち合わせている人がまさかファンだったレッドパンサーだとは思わなくて」

「やめろって、それ」

「え？」

「レッドパンサーっていうな。恥ずかしいだろ！」

小声でヒナはいい、佐抜はうなだれた。

「すみません」

「もういいよ。ここをでようぜ」

ヒナはいった。佐抜が声をあげたせいで注目している人間が何人かいる。
おおもた 大股で歩きだしたヒナを佐抜はあわてて追った。扉をくぐると、

「それ、脱げよ」

ふりかえりもせずヒナがいい、佐抜はキャップを脱いだ。

「はい」

「あんた、いくつ？」

「えーと、三十四です。レ、いやヒナさんと同じ年」

「同じじゃないよ」

「え？」

「あたしは四十になる。東亜にいたときは年ごまかしてたから」

「そうなんですか。三十で引退したんだとばかり思っていました」

「ちがう」

ヒナの口調はそっけなかった。嫌われてしまったようだ。

「ここでいいか」

甲州街道こうしゅうにぶつかる手前でヒナはいった。コーヒーショップの看板がビルの地下を示していた。

「はい」

コーヒーショップは空すいていた。奥の、周囲に人がいないテーブルで二人は向かいあった。

「改めまして。佐抜克郎と申します」

名刺をさしだした。受けとったヒナは興味なさそうに見やった。

「サスキエンタープライズって何の会社？」

「旅行代理店です。海外からの個人旅行や小規模な団体のお世話をしています。ホテルや乗り物の手配、観光ガイドもお引き受けしております」

「ふーん。ベサール語が喋しゃべれるんだって？」

佐抜は頷うなずいた。

「アナタニオ会イデキテ、タイヘン光荣デス」

ベサール語でいった。

「ゴマするんじゃないよ」

ヒナが日本語でいった。佐抜はヒナを見つめた。自分の言葉が通じたのだろうか。

「ワタシノベさーる語ハ、下手デスカ」

「いいんじゃない。変な訛なまりはあるけど、まあわかる」

「またも日本語でヒナは答えた。通じてはいるようだ。だがヒナはベサール語を喋ろうとはしない。」

「ベサール語、お嫌いですか」

つい訊ねた。

「嫌いじゃないよ、別に。でもここは日本だろ。使ってもしょうがない」

佐抜はうつむいた。ベサール語を使ったことを後悔した。調子のいい、中身の無い奴だと思われたにちがいない。落ちこんで黙っていると、ヒナがいった。

「どこで覚えたんだよ、ベサール語」

「大学です」

「へー、大学でベサール語なんて教えてるの」

「はい。話せる人間が少ないから、勉強しておけば将来役に立つ、といわれました」
「フン、とヒナは鼻を鳴らした。」

「で、役に立った？」

「立つ筈でしたが、クーデターが起こってしまって」

「そうか。日本と国交がなくなったものな」

「はい。ヒナさんは今のベサールがどんなだかご存じですか」

「あんまり知らない。たまあに母親と電話で話すけど、そんなに昔とはかわってないってさ。」

ただ中国企業が入ってきて、中国人の店とかが増えたらしい」

「お母さんはベサールにいらっしやるんですね」

「日本で産まれたあたしが六歳のときに両親が離婚してさ、母親はベサールに戻ったんだ。あたしも連れられていったけど、十六でまた日本に帰ってきた」

「お父さんは日本に残っていたんですね」

ヒナはちらりと佐抜を見て頷いた。

「とつくに再婚してて、弟や妹もできていて家にいづらいつたらなかった。だから二年ででた。ヤンチャだったから、オヤジからお前みたいのは格闘技やれっていわれて、東亜女子を紹介されたんだ」

「プロレスに入ったのは、お父さんの勧めだったんですか！」

ヒナは再び鼻を鳴らした。

「オヤジの仕事は芸能ブローカーでさ、ダンサーとかシンガーって名目で、フィリピンからホステスをひっぱっていったんだ。ピンパブのホステスさ」

佐拔は頷いた。ピンパブがフィリピンパブを意味するとは知っていたが、入った経験はなかった。

ヒナは息を吐いた。

「ま、クズだね。ホステスとかいいながら体も売らせていたし。そんなオヤジの家をでられるならどこでもよかった。それでプロレスだよ。トレーニングはきつかったけど、嫌いじゃなかった」

「東亜はガチですものね」

「ガチじゃないよ。あんなものがチでやったら死んじゃう。まあ他よりはガチっぽくやっていただけ」

佐拔は頷いた。プロレスは格闘技であると同時にショウだ。派手な技を決めるには、相手選手の協力が不可欠だ。昔の人はプロレスを本気の「果たし合い」だと信じていたという。「力道山」が活躍していた頃の話だ。演出された「格闘技ショウ」であるを知って楽しむのが正しい。

「でも強かったですよね。クイーンズマツチ三連覇、すごかったです」

佐抜がいうと、ヒナは満更でもなさそうな顔になった。

「よく覚えてんね」

「クイーンズマツチはずっと見にいつてましたから」

クイーンズマツチとは東亜女子プロレスの年間王者決定戦だ。

「そうだ」

佐抜は携帯電話をとりだした。レッドパンサーが初めてクイーンになったとき、泣きながらチャンピオンベルトを巻いた写真をもっていた。前の携帯で撮ったものだが、メモリに残している。

「これ。後樂園ホールで撮ったんです」

涙で顔をぐしゃぐしゃにしたレッドパンサーに紙テープが浴びせられている。喜んでくれるかと思っただけ、

「よせよ」

ヒナは佐抜の携帯を押しつけた。

「そんなもの見たくもない」

佐抜はあつけにとられ、そして悄然しやうぜんとなった。またヒナを不愉快にさせてしまったようだ。

「す、すいません。ごめんなさい」

横を向いているヒナにあやまった。

「別にいいよ。あんたが悪いわけじゃない。あたしが昔のあたしを嫌いだっていうだけで」
ヒナはいった。佐抜は再びうつむいた。気まずい沈黙がつづき、

「で、これからどうすんの」
ヒナが訊ねた。

「ええと、ヒナさんは今日本にいるベサールの方を、どなたかご存じですか」

「日本にいるベサール人……」

ヒナはつぶやいた。

「そうです。ベサール人なら、王妃や王子の事情に興味があるでしょうし、独自の連絡網をもっていると思うんです。そのあたりから訊いてみよう」と

ヒナは佐抜の顔を見た。

「意外に賢いね」

佐抜は苦笑した。

「で、どうなんです？」

「親戚のおじさんがひとりいる」

「お母さんの縁者の方ですね」

「縁者たってさ、ベサールは国民全員をたどっていったら親戚みたいなもんだよ。イトコだのハトコだの、人口が少ないからね。その人も母親のお父さんの従弟の何たらって、よくわからないけど、日本にずっといるっていうんで、だいぶ前に紹介されたんだ」

「そうなんですか」

「前に携帯の番号教わってメモってはある」

ヒナはいつて携帯電話をとりだした。

「これだ。ルーさん。母親もルー叔父さんって呼んでた。今でもつながるかな。かけてみる

か」

「えーと」

どうするか佐拔が考えているうちにヒナは通話ボタンに触れ、耳にあてた。一瞬後、

「もしもし」

という男の声が携帯から流れでた。佐拔にも聞こえるような大声だ。

「もしもし、ごぶさたしてます。ヒナです」

「ヒナ？　どこの店の姐ちゃんや」

とてもベサルル人とは思えない、流暢な日本語で電話にでた男はいった。

「ホステスじゃないよ。マーシーの娘のヒナだって」

「マーシー？　ああ、あのマーシーか。ウシオといっしょになった」

「もう別れてるけどね」

「久しぶりだな、お前。まだ赤いラメのパンツはいてんのか」

佐拔は噴きだしそうになった。赤いラメのパンツはレッドパンサーのリングウエアだ。

「とっくにやめたよ！　ルー叔父さんこそ何してんの。元気なの？」

「ああ元気、元気。まあちよつと商売のほうはぱつとしないんだが。何とか生きとるよ」

わっはっはと笑う声が聞こえた。陽気な人柄らしい。

「叔父さん、今どこにいるの？　ちよつと会って相談したいことがあるんだけど」

「うん？　カネの話なら悪いが役に立ってんぞ」

「お金じゃないんだ。話を聞きたいだけで」

「だったら会おうか。今の住居は江戸川区でな。篠崎ってわかるか」

ヒナが佐抜を見た。佐抜は頷いた。

「わかる。篠崎のどこいきゃいいの？」

「急いでるのか」

「そうだね。早いほうがいい」

「じゃあ今日の夜でも、地下鉄篠崎駅のところにある『たいほう』って居酒屋にきてくれよ。だいたい毎晩そこにいるんだ」

「篠崎駅前の『たいほう』だね」

「そう。六時くらいから九時くらいまでいる」

「わかった、いくよ」

告げてヒナは通話を終えた。佐抜に訊く。

「篠崎ってどこだ？」

「東京の東の端っことです。江戸川を渡れば千葉で」

「そんな外れかよ。でもしよがないか。ルー叔父さんは中古の家電製品やバイクをベサールに輸出してたんだ。買いつつた中古品をおく倉庫が必要なものな。でも今はどうなんだろう。」

中国のスーパーなんかが進出してきて、日本の中古品なんてもう売れないかもしれないな」

ヒナはつぶやいた。

「明るい印象の方ですね」

「だいたいあんなもんだよ、ベサール人で。調子のいい奴が多い。明るいつちゃ明るくていいんだけど、無責任で時間とか守らないし」

「そうなんですか。昔、お会いしたことのある方はとても真面目そうでしたけど」

「上辺をとりつくろうのはうまいんだよ。愛想よくて腰が低くて、いい人だと思わせといて腹の中で舌だしてる」

「えっ」

「あたしはさんざん見たからね。もちろん真面目でいい奴もいるけど、少ないから」

「そうなんですか」

佐抜は息を吐いた。これからの調査が思いやられる。

「まあいいや。六時に篠崎駅のところでもう一回会おう」

佐抜は携帯の地図アプリを開いた。篠崎駅を検索する。写真で見ると、ビルが並んでいた。

「けっこう駅前にはひらけているようです」

ヒナはのぞきこみ、銀行の建物を指さした。

「この前にしよう」

「わかりました」

「勘定、あなたに払わせていいの？」

立ちあがり、ヒナは訊ねた。

「大丈夫です。『南十字星』の人から当座の費用は預かってます」

佐抜が頷くと、

「じゃご馳走になるよ。あと、金の話はルー叔父さんの前でしないほうがいい。タカられる」

ヒナはいった。

「前に母親がこぼしてたのを思い出した。日本にいた頃、よくお金を借りにきたけど返してもらったことがないって」

「わかりました」

コーヒーショップをヒナがでていくと、佐抜はほっと息を吐いた。気が短くて怒りっぽい根はいい人のようだ。

「南十字星」が紹介する『アシスタント』がまさかレッドパンサーだったとは。阪東はヒナの前身を知っているのだろうか。

おそらく知らないだろう。女子プロレスなどおおよそ興味をもちそうにないタイプだ。

時計を見ると、午後三時になったばかりだ。まだ時間がある。佐抜は一度、自宅に戻ることにした。

五

午後六時に数分早く、佐抜は篠崎駅前の銀行ビルの正面にいた。「端っこ」とヒナにいつてしまったが、駅の周辺はビルがたち並び、大型スーパーや量販店、ファストフードショップ、カラオケボックス、コンビニエンスストアがテナントを埋めている。

夕方とあって人通りも多い。その人種もとりどりで、中国人もいればインド人もいる。自転車に乗った中学生の集団が信号待ちをしていたが、半数が日本人ではなかった。ふつうに「オレなんかさあ」と日本語を喋^{しゃべ}ってはいたが。

「たいほう」の場所は調べてあった。駅の南口に面したビルの地下一階にある。

六時十分過ぎにヒナが現れた。服装はかわっていないが、革のキャップをかぶっている。

「たいほう」の入ったビルは古い造りで、地下へは階段でしか下りられない。地下一階に入る